
旋律師

氷月 晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旋律師

【Nコード】

N7457X

【作者名】

氷月 晶

【あらすじ】

姫月伊織。オルゴールショップ「メロディーボックス」の店長。そして、旋律師——それは、「全財産」と引き換えにオルゴールを「処方」し、人の悩みを解決する異能者。音の精霊の助力を請い、彼女は客の心が抱える痛みをほんの少しだけ和らげる——。

ブローグ 都市伝説

あなたは、こんな話を聞いたことはないだろうか。

S県S市。

かつては取り立てて何もなかったここに、学園都市が出来たのはそう昔ではない。

つまり、都市伝説のようなまことしやかな「昔からのウワサ」がほとんど存在しない。

だが、その限りではない場所があった。

市の中心となっている「蒼洋学院」から、少し離れた場所。市町村の統廃合の際、S市に併合された「向日町」。向日町は蒼洋学院が出来てから緩やかに地価が上がりつづけ、今ではちよつとした高級住宅地だ。

この町にはあるときから、こんなウワサが流行し始めた。

曰く、「向日町のどこかに、お悩み相談をしてくれる店がある」。それだけなら単なる占い師の店の宣伝文句と思われるだろうが、この話は少し違う。

何とその店、オルゴールショップだというのだ。

その店では、「全財産」と引き替えに。ひとつだけオルゴールを「処方」してくれるのだという。

本物とも偽物とも見当がつかない、都市伝説、である。

Case Nonomber: "Callion Bell"

からん、とドアベルが軽やかな音を立てた。

「こんにちはー」

ここはオルゴールショップ「メロディーボックス」。その名の通り、オルゴールを販売する店である。店主いわく「金持ちの道楽商売」という程客は来ないが、商品の質が良いのか裏稼業の為か、まあまあ保っていたりする。

レジを兼ねたカウンターの中で、1人の人物が顔を上げた。

滑らかな黒髪に、金と見紛う琥珀の瞳。男女の別も見えない顔立ち、凛々しくもあり、たおやかでもあり。

この人物こそ、姫月伊織。この「メロディーボックス」の店主、である。

「こんにちは、華宮くん」

柔らかく微笑む彼女は、しかし「華宮くん」——華宮 誠を目にして不審そうに首を傾げる。

「……華宮くん。あなた、また何を連れて来たの？」

誠は意味がわからない。伊織はそんな彼の頭の上に、手を差し延べた。

引き戻されたその指先には、燐光で象られた尾の長い小鳥が一羽。呆れ返る伊織。

「あなた、だあれ？ いえ、『何』？」

誠は、呆然とするしかなかった。いくらなんでも、鳥が頭に乗っていたら重みくらい感じるだろう。だが、そんなことはかけらもなかった。つまり、この小鳥はこの世のものではない、ということになる。

（まさか、ユーレイさん……?!）

小鳥はぱくぱくとクチバシを動かした。何も聞こえない。片眉を上げた伊織は、長々と溜息をついた。

「……うち、オルゴールと感応した人は割とよく来るけど、オルゴール自体が来たのは流石に初めてよ……」

「はい？」

情けなくも、誠が漸く発せた声は、それだけだった……。

「……で、『何』かわかったのか」

「さっぱり」

カウンターに座り込む黒猫——ユーリイの問いに、面倒そうに伊織は両手を広げてみせた。

「珍しいですねえ、伊織姉様がわからないなんて」

「そりゃあ、私にだってわからないこともあるわよ、真理ちゃん」
真理子の無邪気なツツコミにうなだれる伊織。

「なーんでこんな厄介な客がくるかなあ？　うちのオルゴールの音も借りれないなんて、どんなレアな曲なのよ」

「どつという意味です？」

「音を操る私達『旋律師』にも、向き不向きの個人差があるってこと」

伊織は、音を「見聞きする」能力が殊の外高い。ユーリイもその為に見出だされた存在だ。誠は不思議そうに首を傾げる。

「皆そうなんじゃないんですか」

「ええ。旋律師の中にはCDアルバムを持ち歩いて、そこから都度^{おも}音霊に助力してもらう人もいるし、直で楽譜を読み込んで精霊出し^{だま}ちやう人もいるしねえ」

「完成された音曲を必要とする伊織は、やや特殊な方だな」

そう、伊織は聴音検分は得意なのだ。が、音を出さない——例えば、今日の前に鎮座ましましてゐる小鳥のような——ものには、とんと手が出ない。普段客の悩みを何とか引き受けられるのは、オルゴールという媒体があるから。どうしようもない時には自らピアノを弾きまくり曲を捜す程、彼女の能力は音に依存している。

伊織は悩む。

「……華宮くん」

「はい？」

「あなた今日、ここに来るまでに寄り道とかした？」

誠は首を横に振った。

「今日は真っ直ぐ来たんですよ？」

今日は部活が終わってから、友人らの誘いを断って真っ直ぐ店まで来たのだ。これだから、正練が長引くと困る。

「立ち寄りも？ コンビニとか」

「コンビニにも寄ってません」

誠の声に、少しだけ刺が混じる。

嘘はついていない。どこの店にも寄ってないし、立ち話もしていない。ただ一度、立ち止まったただけだ。

「……では質問を換えるわ。誠くん、あなたどこかで立ち止まりもしなかった？ 誰かに引き留められたとか、何かを耳にした、とか」
誠はきよとんとした。

「え、それも『立ち寄り』なんですか？」

「言葉としては違うけど、行為としては、似てるかも」

小鳥がこくこくと頷く。

「あー、ちっちゃい教会の前で立ち止まりましたよ。賛美歌が聞こえて」

また小鳥が頷いた。

「……伊織、こいつ頷いたぞ」

ユーリイが小鳥を指差すと、伊織はまた面倒そうな顔をし……溜息を、ひとつ。

「……華宮くん。その教会まで道案内お願いするわ……」

聖マリア修道教会。それが、誠の案内した先だった。

「……で、何故にここから離れたんだ、この鳥は」

「それを今から探るんでしょうが」

人の姿に変化したユーリイを肘で小突く伊織。

「普通は宿ったオルゴールから離れないのが『音の精霊』なんだから、よっぽど切羽詰まっているのよ。……まあ、まずは壊れて動かないオルゴールを捜すのが先決だけど」

そういうと、伊織は大きな溜息をついた。誠は首を傾げる。

「どうしたんです？」

「……いや、ね。これからの未来を脳内で垣間見たんで」

「当てるやろうか」

「要らないわよ、嫌みっこ！」

にやにや笑うユーリイに、伊織は手にしたクラッチ（杖）で殴りかからんばかりに噛み付く。

今度は傍観していた誠が溜息をついた。

そこに。

「！」

教会の中から、微かな音が漏れ聞こえてくる。伊織は素早い反応を示し、手繰り寄せられるように教会の扉へ近付いた。

「あ、これこれ。これが聞こえてきて、立ち止まったんだ。クリスマスソングの定番だなーって思ってた」

「ああ、『もろびとこぞりて』だものな」

誠の指摘にユーリイが頷く。

伊織は、ごく無造作に扉を開いた。途端、オルガン伴奏の「もろびとこぞりて」が一気に溢れてくる。

この教会は礼拝堂のみの作りらしい。だが内装はカトリックらしく整えられており、真正面にマリア像を据えた祭壇が置かれていた。その前に即席のひな壇が置かれ、聖歌隊が並んでいる。オルガンは……移動式のポジティブオルガンだった。

「あらあら、どなたでしょう？ 初めてのの方ですわねえ、珍しいこと」

オルガンを弾いていた老齡のシスターが、伊織達を見て立ち上が

った。聖歌隊も、歌を止める。

伊織は深々と礼をした。

「練習中に申し訳ありません。つい、歌に惹かれてしまつて」

嘘ではない。うっかり何の気無しに踏み込んだ理由はそれだ。

シスターは嬉しそうに微笑んだ。

「そうですか。でしたら、練習をご覧になる？」

「ありがとうございます」

伊織はもう一度頭を下げると、居住まいを正す。ユーリイは馴れた様子で彼女の背後に控え、誠は所在無げにユーリイの隣にたつ。

シスターは聖歌隊達に声をかけると、オルガンに弾き始めた。

賛美歌というのは、基本的に前奏部がない。その為、歌の最後4小節程度を前奏の代用とする。「もろびとこぞりて」なら、「主は来ませり 主は来ませり 主は 主は来ませり」の部分だ。

伊織はわくわくしながら、指先で身体を叩いていた。彼女は、音楽とつくものに関しては割と雑食な傾向がある。宗教には懐疑的でも、宗教「音楽」はウェルカムだった。

だが。

「あうつ……！」

ノイズのような短い悲鳴を零し、伊織は膝を折った。

「伊織さん！」

慌てて手を伸ばす誠。彼は、伊織が膝を床に打ち付ける前に何とか間に合った。

「伊織」

ユーリイに背をさすられ、伊織は顔を上げる。目が、どこも見ていない。

「……『歌わせて……』？」

「？」

誠は首を傾げる。

「『歌わせて、どうかもう一度。子らと共に』……？」

伊織自身も、戸惑っている様子だった。

彼女の瞳に、光が収束する。

「……え、そんな、まさか……」

伊織の胸に、何か、ものすごい嫌な予感が過ぎる。

店に来た時のように誠の頭に乗っていた小鳥が、ぱさりと飛び立った。伊織達以外には誰にも見えないそれは、シスターの奏でるポジティブオルガンの縁に留まり、歌うように口をぱくぱくさせ始める。

「……ああ、成る程な……。道理で、精霊だけで動ける程力がある訳だ。長い年月人の『祈り』を歌い続けてきたことで、強い力を持ったのか」

ユーリイはがりがりと頭を掻き、呆れた風情で溜息をつく。

「じよ、冗談でしょ……？ あなた、まさかの大物ね……」
茫然と呟く伊織。

「……あの、大丈夫ですか？」

聖歌隊の1人が、伊織の様子を見るに見兼ねて声をかけた。

「すみません、こちらにカリオンはありませんか？」

「カリオン？」

「そう、カリオン。機械仕掛けのベル。鍵盤操作で演奏するタイプもあるけれど……」

聖歌隊員は少し考えてから、シスターを振り向く。シスターは不可解そうな顔をしながらも、2階………というか、伊織の頭上の張り出し部分に発条仕掛けの大掛かりなものがあると教えてくれた。

「でもねえ、もう壊れてしまっていて、音はならないんですよ」

「『音は』？」

「ええ。発条の回る音はするのだけれど」

シスターいわく、この教会が出来た時からあるとのことと、修道会の本部からもう廃棄しようかという話が来ているらしい。

「勿体ないなあ。発条が動いてるってことは、駆動系には問題無いって事なのに」

2階に上がる階段の途中で、伊織は不満げな声を零した。

「ああ、機械型で良かったわ。鍵盤型だったら私にはお手上げだもの」

誠の脳内にハテナが飛びまくる。

「……ええと？」

「ああ、カリヨンには基本的に2タイプあるの。市庁舎なんかで鳴らすようなオルゴールタイプと、鍵盤操作でベルを鳴らすタイプ」
「がちやり、と錆びた音を立てて、演奏室へのドアが開く。」

「わ、ここって礼拝堂の上なんだ」

誠は目を丸くして、壁の縁から下を覗いた。

「落ちるなよ」

「あのさあ、ユーリイって僕のこと必要以上に子供として見てない？」

不満げな誠の様子に伊織はふと笑い、礼拝堂の方へ手を伸ばした。
その指先に、ふわりと小鳥が舞い降りる。

「さ、カリヨン・ベル。何処が悪いのか教えて頂戴」

「……とはいえ、声のでない小鳥——「カリヨン・ベル」に悪くしている箇所を教えられるはずもなく、実際動いて埃まみれになるのは、伊織である。彼女は早速、カリヨン本体のカバーを外し、中を覗き込む。」

彼女のあまりの行動力に、誠は少しだけ啞然とした。

「そついうのやるのが、バイトなんじゃ……」

「訳のわかっていないお前がやると、尚更壊しかねんからな」

「ひ、ひどいな」

ユーリイのからかいに胸を押さえ、傷付いた、という仕種をしてみせる誠。

「カリヨン・ベル」は何を思ったのか、すいと飛んで来て誠の肩に留まる。そして彼の頬に擦り寄り、嘴をぱくつかせる。

「……何何、何だい？」

慌てる誠に、ちょうど頭を引っこ抜いた伊織が、鼻の頭を真っ黒にして笑った。

「あはは。華宮くんがユーリイにいじめられたと思ったみたいね」
「え？」

「キリスト教の子^{クリスチャン}つて、カトリックでもプロテスタントでもそんな傾向があるんだよね。傷付けられた人に寄り添う、っていう」

誠は「カリヨン・ベル」を横目で見た。「カリヨン・ベル」もまた彼を見返す。

「大丈夫だよ、ありがと」

にこつと誠が微笑むと、「カリヨン・ベル」はもう一度身体を擦り付けて飛び立った。

「いい子だね、カリヨンちゃん」

「大事にされてきた証だな。……伊織、どうだ」

またぞろ内部に頭を突っ込んでいる伊織の背に、ユーリイが声をかける。

「うーん、実を言うと暗くて見えないのよ。明かりを……あいたっ！」

ごちつ。良い音が鳴った。ユーリイは溜息をつき、伊織の背中を掴んで引っこ抜くと、自分が首を突っ込んだ。

「最初からこうすれば良かった……」

痛む頭をさすりさすり、伊織は唇を尖らせる。考えてみればユーリイは人ではない「魔」なのだから、人にとっての暗闇くらいどうということもない。

「ユーリイ、どうだい？」

誠はしゃがみ込んで一緒に中を覗く。ユーリイはすぐに、「見つかったぞ」と上半身を引き戻した。その手には、大きな歯車とそこに突き刺さった短い棒。

「シャフトが折れていたのだな。動力を伝える部分だ、道理で発条の音はしても鳴らないはずだよ」

「あらら。何時ぐらいに折れたのかしらね」

「折れてからはさほど経っていないようだが……経年劣化だろうな。見る、サビに食われている」

伊織はユーリイから歯車を受け取り、そつと撫でた。

「可哀相に……ちよつと見るだけでわかった異常でしように」

よく見れば、歯車の歯も大分丸くなっている。もしちゃんと手入れをしていても、そろそろ交換時だろう。ある意味、良い機会だったのかもしれない。

「刻印の字からしてイタリア製みたい。部品は海外から取り寄せになるからちよつと時間がかかるけれど……大丈夫、直るよ」

「カタリナの間屋なら、すぐ見つかるんじゃないか？」

「やだ、よしてよ！私があの人苦手なの知ってるでしょ。」

伊織は「カリヨン・ベル」に笑顔を向けた。だが、「カリヨン・ベル」は悲しげに首を振った。

「カリヨン・ベル？どうしたの。心配しなくても、こんなの簡単よ？何をそんなに落ち込んで……」

ふと、伊織が言葉を切った。

「？伊織さ」

「しっ」

指を口許に立て、誠を制す伊織。彼女は静かに、階下の礼拝堂へ聞き耳を立てた。

「そんな、明後日ですか？！」

シスターの悲鳴じみた声が聞こえた。

「司教さま、あんまりですわ。今日もあのカリヨンを見に来た方がいらつしやるのに」

「しかしだね、音の出ないカリヨンなんてうちには置いておけないのだよ」

「そんな……だからって……」

伊織は意識的に聴覚をカットした。事情はわかった、自分には聞くに忍びない。

「カリヨン・ベル」が、伊織の肩に留まった。

「……知ってたの、カリヨン・ベル」

小さな頭が、こくりと頷く。

「『だから、あなたを喚んだ』」

『会いたかったから』

『ずっと昔、わたしの歌を褒めてくれたあなたに、お別れを言いたくて』

「カリヨン・ベル」のその言葉で、伊織は幼い頃を思い出した。

まだ父が生きていた頃。

礼拝堂の尖塔に留まり歌い続ける不思議な姿の精霊に、伊織は言ったのだ。

「きれいなね」と。

「……………ユーリイ、華宮くん、行くよ」

「どこへ？」

誠は、唐突に立ち上がった伊織に素っ頓狂な声を出した。

「カタリナは苦手なんじゃなかったのか？」

「背に腹は代えられない。さっさと行くよ！ タイムリミットが明後日じゃ、どんなに急いでも時間が足りないわ」

伊織は「カリヨン・ベル」をそつと両手で掬い上げると、額を寄せた。

「待っていて、カリヨン・ベル。必ず、善いようにしてみせるわ」

「カリヨン・ベル」は、名残惜し気に頭を擦り寄せた。

司教達が業者と共に教会へ姿を現したのは、聖歌隊の練習中だった。

だが、彼らは開け放たれた入口で押し問答をしている。聖歌隊達が司教達を閉め出そうとしているのだ。

「司教さまは横暴です！」

「1度も見ずに捨てようだなんて」

年齢がまちまちの聖歌隊の中には、カリヨンが動いていた頃の様子を必死に伝えようとする者もいる。

そのさなかに、伊織は辛うじて滑り込んだ。

「間に合った！」

ベレー帽にケープを纏う彼女は、随分と息を切らせている。

「待たせたな、旧き同胞よ」

ふらつく伊織の腰を掴み支えながら、ユーリイはホツと息をついた。その2人の後ろについている誠は、何か長い包みを大事そうに抱えて、肩から提げた鞆を揺すり上げる。

「な、何なんだ君達は」

司教からしてみれば、得体の知れない妙な3人組だ。

「この町唯一の、オルゴール調律師ですわ」

伊織はにやりと笑ってふざけた敬礼の仕種を試みせた。

「貴女達、この間の……」

目を丸くするシスター。

「すみません。あの時、上でお話を伺いまして」

「御恥ずかしい限りだわ。さあ、どうぞ」

「ありがとうございます」

伊織は丁寧な礼をすると、人々の間を擦り抜けていく。そして司教の右脇を通り過ぎる瞬間——ぐいっと、その腕を引っ張った。

「何を……」

「卑しくも東方の賢者を名乗るなら、一緒にいらしては如何？ 貴方がどんなにか呆れ果てたことをしようとしたのか、見せてあげましょう」

伊織はそのまま司教を引きずり、ユーリイと誠が開いてくれた道を進む。かの「カリヨン・ベル」の許へ。

「何故、音が出なくなっただと思います？」

「それは……錆びて使い物にならなくなったからだろう？ だからこつやって……」

「ええ、確かに錆びてはいました。精確にはたつた一本、駆動部と演奏部を繋ぐ歯車を支えるシャフトが、錆びて折れていたんです」

司教の言葉を遮った伊織は、彼の顔をきつく睨んだ。

「今回のことは、全て貴方達の怠慢のために起こったことよ。貴方

達がほんの少しの金と手間を惜しんだが故に、『彼女』はその永く続く命を諦めようとした。人々の信仰を共に歌い継いで来た、その命を！」

司教は怯む。

「カリヨン・ベル」の前、伊織はぱつと彼の腕を放すと、誠から包みを受け取った。

「それは、何なのですか？」

司教に付いて来た若い司祭が、興味津々の様子で覗く。

「とりあえず、応急処置の部品です。残念ながらちゃんとしたシャフトは取り寄せが間に合わないの……無理をさせることになりま
すから、年が明けたら専門家に診せて下さい。後で紹介状をお渡し
します。吹っかけてくるようなら殴り込みかけますから、うちに言
ってきて下さいね、シスター」

「え、ええ……」

彼女は、喜ぶべきかどうか判じかねているようだ。それはそうだ
ろう、急にふらりと入ってきた3人組は、礼拝の為ではなくカリヨ
ンの修繕の為に来たと言い、また直ると言い切っているのだから。

「だからね、そんな顔しないの。カリヨン・ベル」

伊織は「誰か」に向かつてそういうと、背面のカバーを外して中
に潜り込んだ。今回は、上下逆だ。

「……だから、汚れる仕事はバイトにさせれば……」

「華宮くん、明かり」

「はい」

誠はペンライトを付けて伊織の腹に置いた。白い手がそれを取り
……少しして、細い金属の棒がするすると出て来た。確かに、片方
の端が朱く錆びてしまっている。

「あ、ここが折れたんだ」

「渡すぞ」

感心する誠を尻目に、ユーリイは替えのシャフトを慎重に送り込
む。そして、昨日伊織がせつせと磨いた金色の歯車を彼女の腹に置

いた。

「……………よし、噛んだ。ユーリイ、一度発条を逆に回して！ 外さないですよ？」

「わかつている」

ユーリイは心得た様子で巻き上げ用のレバーを逆に回す。
その時。

シャ ン。

「！」

きらびやかな、ハイD（2点レ）。

「けほっ、こほ……………いやぁ、中で聞くと凄い音！」

動いた瞬間、中の埃が振るい落とされたい。ペンライトを振り振り、伊織は咳込みながらずり下がり出てきた。

「……………直ったのかい？」

「はい」

司祭に頷いて見せた伊織は、「カリヨン・ベル」の上を見遣った。

「ね、だから言ったでしょ？ カリヨン・ベル——いいえ、『レジーナ・カンタンテ』」

そこにいたのは、妙齡の、女性。彼女は戸惑ったように自身を見回し……………ふわりと、伊織の前に身を降ろした。2人は笑い合う。

「貴女の歌を聞かせて、レジーナ。報酬はそれで良いわ。……………って言うか、貴女の払える報酬ってそれくらいしかないでしょ」

茶目つ気たつぷりの伊織の言葉に、「レジーナ・カンタンテ」は
気恥ずかしげに微笑んだ。

「ユーリイ！ ミュージックペーパーは入ってる？」

「ああ、上手い具合に曲の頭だ」

「いや、それを狙って逆回ししたから」

「……………成る程な。ほら誠、ネジ回せ」

「絶対、ユーリイの方が力あると思うんだけどな、僕」

「運動部員だろうが、お前。ほら、回せ回せ」

「ったくう」

皆、テンポの良い2人の会話にくすくす笑った。

「さあ、お披露目よ！」

カシャン。

「レジーナ・カントアンテ」は、その身を両手で掻き抱いて震わせた。その唇が大きく開かれ――。

「Joy to the World」……！」

華やかなカリヨンの音色が、辺りを満たす。

「司教さま、これ勿体ないですよ、廃棄なんてしたら！」

「う、うむう……」

あまりにも興奮した司祭の様子に、司教は眉間にシワを寄せて唸る。

「『歌わせて、子らと共に。もう一度』」

伊織はふと呟いた。

「歌うと良いよ。一度ならず、何度でも……一緒に歌おう」

「レジーナ・カントアンテ」は、両腕の代わりに在る両の翼をばさりと広げ、胸を開く。まるで、オペラのプリマのようだ。

伊織も、それに倣った。

諸人こぞりて、迎えまつれ！

久しく待ちにし主は来ませり

主は来ませり 主は 主は来ませり！

（賛美歌 112番より）

「僕、礼拝出たの初めてですよ。綺麗な歌でしたね」

「そうだね」

招待されたクリスマス礼拝を終えて、2人はゆっくりと礼拝堂から外へ出る。

「綺麗な音だったね、あのベル。何だっけ、カリヨン？」

「ああ、あれね。いろんな曲を演奏出来るって言うてたね」

ちょうど通りすがった2人組が、そんな話をしながら2人を追い越していく。

「パパ、お歌すごかったね」

「そうだな。パパがお前くらい小さかった頃から、ここのクリスマスはあのベルで歌っていたんだよ。懐かしいな、何時だったか壊れたって聞いて、すごく悲しかったんだ」

「ふうん」

ほほえましい親子の会話が、背後から聞こえてくる。

「……良かったですね、直せて」

「うん」

そっとかけられた誠の言葉に、伊織は気恥ずかしげに微笑んだ。

「そういえば、伊織さん？」

「なあに？」

「あのカリヨンに、『レジーナ・カンタンテ』って呼びかけたじゃないですか。あれ、どういう意味です？」

「ああ、レジーナ・ディ・カンタンテね。彼女の名前だよ。歌い手の女王、ってところかな」

「へえ」

「正確には彼女の機種名みたいだけど、日本にはあまり残ってないでしょうし、実質、個体名ね」

「成る程、綺麗な名前ですね」

「そうだね。……あ」

不意に、伊織が視線を上に向けた。誠もその視線を追う。

果たして、尖塔の上には「彼女」がいた。

シャーン。

ありがとう。

2人は、そう言った気がした。

「……夕方の」

「はい？」

「夕方から始まるページェント、観に来よっか」

「……そうですね」

伊織と誠は、幸せに微笑み合った。

End .

Case Nonomber: "Callion Bell" (後書き)

「旋律師」という作品自体はともかく、この「ケース ノーナンバ
ー」はもともとある年末企画でボイスドラマを作成するのに、その
原作として提供しました。

テーマはごくシンプル、「クリスマス」です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7457x/>

旋律師

2011年10月20日00時14分発行